手をのばせば君が

サトリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

手をのばせば君が

【Ｎコード】

Ｎ１２０６Ｄ

【作者名】

サトリ

【あらすじ】

恋が昔のトラウマで大嫌いになってしまった中村素奈緒（なかむらすなお）たった一人の大切な友人の藤川拓海（ふじかわたくみ）に恋心を抱かれてしまう。拓海に裏切られたと思った素奈緒は拓海と上手く接することが出来なくなってしまうが……。

1（前書き）

明るく、ハッピーエンドを目指します（・∪・●）

よろしかったら見ていって下さい

1

眩しいくらいの春の朝日。

ここは教室の隅っこ。

窓枠に腕を乗せて、少ない平和な学校生活に浸る。

学校が始まる一時間前に教室にいるなんて、私の見た目的に有り得ない事だろう。

本当にアイツさえ居なければ、私の学校生活は誰とも関わらず、ただただ静かに過ぎていったはずなのに……。

廊下から足音が聞こえる。

こんな早くにこちらに向かってくるのはアイツか先生しかいない。

そして、私の嫌な予感は当たっている。

お気に入りの耳に付いてる青い蝶のピアスをクリクリといじくりな

がら、そっと目を閉じた。

《ガララっ》

「スナちゃんっ！！何で先に学校行ったんだよっ！！待っててって言ったじゃん！！」

春になるというのにスカートの下に長いジャージを着込んだ私は、椅子の上で豪快にあぐらをかき、例のアイツの方に向きかえる。

「一緒に行くなんて言ってない、朝からうるさいから怒鳴んないで」

ヤンキーみたいな見た目は結構楽だ。

地べたには座れるし、女子なんてちょっと睨みをきかせればどっかに散っていく。

こいつは女子じゃないから睨んだ所で逃げたりしないけど。

「でも、昨日もその前もその前もその前も……明日は一緒に行こうって口でも言ったし、メールもしたじゃないか」

シュンと縮こまるコイツ……藤川拓海は私と幼馴染みだ。

私の母親は銀座の高級クラブのママだ。
あの漫画にもなった人と一緒に働いたとか働かないとか……。

それなりにそこら辺では名の通ってる人だ。

そして、拓海の父親は藤川物産株式会社、株）藤川コーポレーション、藤川宝石店、ＦＵＪＩＫＡＷＡ…ｅｔｃ……。

大変なおぼっちゃま君なのだ。

「知らない……あんたは金持ちなんだから金持ちらしく黒塗りのベンツとか白のロールスロイスとか乗ってきなさいよ」

プイっと背中を向けると申し訳なさそうに、私より６ｃｍ大きい体を曲げて謝ってくる。

この男は私に幼い頃から片想いをしているのだ。

「素奈緒、今日は藤川のおじさんに会いに行くわよ」

私は、昔から男の子みたいにジーンズにTシャツにスニーカーという格好がしたかった。

だけど、藤川のおじさんという人に会うときは必ずといっていい程、ピンクやら水色やらのワンピースにレースの付いた靴下と、入学式のような服装で出かけなくてはいけなかった。

超が付くくらい不愉快だ。

だからといって、嫌だとは言えなかった。

あの頃の母親はよく私に手が出る人で当時私を助けてくれる人などいなかったからだ。

母一人子一人。

それは今でも変わりない。

気付いたらしかめっ面になる顔を頑張って緩めて、キチンと待ち合わせ場所の喫茶店の椅子に座ってただ時間が過ぎるのを待つ。

動物園や遊園地、ミュージカルに別荘と、藤川のおじさんには沢山遊びに連れていってもらったが、一つも楽しいと思えなかった。

そんな私を見かねた母とおじさんは、同い年だというおじさんの一人息子を連れてきた。

それが拓海だったのだ。

絵にかいたようなお坊っちゃんの拓海……私は彼に嫌悪感しかいだかなかった。

父親の後ろに隠れてはにかんでいた拓海を、私は、私と違う動物か

何かを見るような感覚で、気がついたら睨んでいた。

甘ったれている。

私はそんな風に隠れる所も、甘えられる存在もない。

嫌悪感とともに羨ましがっている自分に少し心が痛んだ。

「素奈緒、ご挨拶しなさい」

母がマネキュアで美しく飾られた手で私の背中を押す。

「こんにちは、中村素奈緒です」

年相応にもじもじとうつ向くこともなく、少し見下ろすように挨拶をした。

拓海は私の態度に少し驚いたようで、目を見張ると顔を真っ赤に染めて、口の中でボソボソと挨拶と自己紹介をした。

そんな様子に少し拓海がかわいらしく見えて、お姉さんになった優越感があった。

それが、私達二人の初対面だ。

あれから約１２年間私達は事あるごとに親たちの強制のもと会わさ

れていた。そして、年をおう事に私達は親たちから自立して、お互いが、かけがいのない友人のとなっている。

私はそう思っていた。

藤川のおじさんは私を楽しませようと必死になって会うたびに拓海を連れてくるのだと……。

それが……。

「俺、スナちゃんと同じ高校に行く」

有名私立中学校の制服をきっちりと着て、拓海はいつもの喫茶店で向かいに座る私に言った。

携帯電話というツールを親から中学校に上がってから与えられた私達は、二人きりで会う事も多くなっていた。

私達は親から多額の小遣いをもらっていたため、生意気に喫茶店やファミレスにたむろしていた。

「なんで…拓海の行ってる学校は幼稚園から大学までエスカレーター式でしょ？たしかに私の行きたい高校も拓海の行ってる学校も偏差値も進学率も申し分ないけど……。」

まだ夏休みに入る前の特に暑い日。

手元にあるアイスドリンクの氷が小粋にカラリと音をたてた。

「俺……スナちゃんが行くから行きたいんだ」

「バカじゃないの？絶対私立の方がいいんだから！！そんな私がいるとかいないとか関係ないでしょ！！！」

詰め寄ると拓海が眉をしかめて両手をギュッと握る。

「おっ俺っ！！スナちゃんがずっと好きなんだっ！！！！！」

喫茶店に居た客、店員、一同消沈。

どういう意味の好きかは、不思議と解った。

私は見た目はチャラチャラしているが、母を見ていたからかはよく解らないが、恋愛の類は大が付く程苦手で、拓海が私を女の子として見ていたのが嫌だった。

何故か裏切られたような……そんな気がしたんだ。

結局私は拓海を睨みつけると、バックを引っつかんで、喫茶店から乱暴に出た。

拓海の優しさなのかは解らないが、私を追って来ることはなかった。

その日の内に、何度も拓海からメールや電話が来たが、私は全て無視した。

きっとそのメールや電話は私に謝る内容だったのだろう。

謝ったきた所で許したくない。だって、私達は友達だし、私が恋愛が大嫌いな事は彼は知っていた。

なのに私にそんな感情をずっと持っていたのは裏切り行為だ。

ずっと友達でいてくれると約束をしたのに。

ため息と同時に私はまだ母の幻影に脅えていたのに気付く。

恋愛が大嫌いなのは私だけで、拓海は普通の人なのだ。

私の様な特殊な家庭環境で育った訳ではない彼にとって、あんな風に自分の気持ちを無視されて、何て傷付いたことだろう。

きっと優しい拓海のことだから、悩んで悩んでやっと私にその想いを伝えたはずなのに……私は何て酷い事をしてしまったのだろう。

そんな矛盾した二つの考えに翻弄され一ヶ月程たち、もうケータイは拓海からの着信を知らせる事はなくなった。

ケータイのディスプレイを見るだけで、イライラした。拓海にイラついていた訳ではない、自分にイライラしていたのだ。

いつまでも、幼い頃に見た、母が男達にしなだれかかって媚を売るあの光景が忘れられない。

母が男達に媚を売るのは仕事の一つだ。それのお陰で私は人よりも良い暮らしと、平安な生活をおくっている。
なのに、私は何故男女間のその感情を排除したくて堪らなくなるのか、そして、それが受け入れられずに、拓海というかけがえのない人を拒絶してしまうのか。

考えただけで断続的に酷い喪失感と、胸の痛みが襲ってくる。

拓海と同じ恋愛という感情を彼に向けられたなら、どんなに楽だっただろう。

中学三年の受験シーズン真っ只中

。拓海から連絡が来なくなって意味をなくした携帯電話の電源をおとしたまま、机の鍵がついている引き出しにしまいこんだ。

今は考えたくない。

そう思って、もう分かりきっていた中学の学習内容を教科書を見ながら一からやり直したり、高校の内容を丸暗記したりと、私はただがむしゃらに拓海を傷付けた罪悪感と孤独に押し潰されないように忘れようと必死だった。

拓海が私と同じ高校に入る事が決まったのを知ったのは入学式も間近に迫った一週間前。

1日づつ近付いてくる入学式の日付に落ち込んだ。

入学式が来るのが嫌で嫌で仕方なかった。

嫌だ嫌だと思うと、その時間はあっという間にやってくる。予防注射の順番待ちと一緒だ。

拓海も同じ思いだと思っていた。

自分をこっ酷くふった女など、会いたくないけれど、私達は友達だから会ってなんて接すればよいのか……と、そう思ってくれているとしかし、拓海にとって私はずっと友人にはなれていなかったようだ。

「おーい！！スナちゃん！！！」

明るく、思いきりこちらに手を降る拓海。

その隣には拓海より幾分小柄で可愛い女の子がいた。

今時な、スカートを短く履いて、少しダボッとしたカーディガンをはおった女の子。

髪の毛は黒くストレートで、桜の花びらが散るのと同時にフワリと揺れた。

拓海を前の学校から追い掛けて来たそうだ。

ご苦労様な事だ。

追い掛けなくても、いずれこの可愛い女の子…実優さんと付き合う事になっただろう。

１５６ｃｍと小柄である事と可愛いらしい容姿は嫌でも男の目に付くだろうし、実際入学そうそうすぐ後ろの男達に噂されていた。

私はというと、怖そうな女子がいるとひ弱そうな男子が脅えて私か

ら一歩離れ、少し調子に乗った男子が私に声をかけようとして、睨んだ私に息をのんで断念していた。

女子達は余程努力してこの進学校に入って来たのだろう。思いきり顔をしかめて、私の服装や容姿のダメな所を上から順に話していった。

そんな物は皆無視する。

だって中学の時とあまり変わらない。

仲良くなんてしたくないし、私は出来ないだろう。

校長先生の長いありがたい話の後に、私の茶髪の髪の毛について学年主任に入学そうそう呼び出しをくらって、肩を落として教室に入っていった。

皆、席に座っている。

拓海と同じクラスになったのは確認していた。

中村と藤川と、あまり五十音順には近くないが、運がいいのか悪いのか、私達は席が前後になった。

担任の教師なのであろう優しそうな中年の淡いピンクのスーツを着て、髪の毛はしっかりパーマをあてた先生に軽く会釈をして席につく。

私の様な問題児の担任をするのは久しぶりなのか、初めてなのか、会釈をした私に無理矢理な笑顔を見せると、先生はホームルームを始めた。

一人一人の自己紹介はまた明日時間をとるのだろう。

学校紹介と部活、生徒会の案内の配布と先生の話しだけでホームルームは終了して、今日はお開きになった。

後ろに拓海がいるというだけで気まずかった。

早く帰って眠り、なにもかも記憶から消してしまいたい。

急いで帰ろうと教室を出ようとすると不意に腕を掴まれた。

「スナちゃん。一緒に帰ろう」

ニッコリと笑って言う拓海の顔を見て、彼が無理をして笑っていないと解った。

無理矢理笑ってる時は唇の両端が下にさがるのを幼馴染みの私は知っていたから。

なんで、平気で笑えるのだろうか？

私はたくさん悩んで、拓海という存在を失ってしまうのでは無いかと、内心ずっとビクビクしていたのに。

私は、拓海にとってなんだったんだろう。

母とあの男達の様に、私が嫌悪し続けたような関係だったのか？

私は勝手に、勘違いをしていたのか？

「……」

上手く声を発する事も、幼い頃から練習してきた頬を緩ませて、笑顔を作る事もできなかった。

むしろ、しなかったのかもしれない。

「スナちゃん？どうしたの？」

不思議そうに黙っている私の顔を覗きこむ拓海。

急に、心の芯から冷えていく。

大事なものを無くしてしまって、もう取り戻せない。

頭の片隅でこんな風に思ったが、すぐに違うのだと私のハイテクな脳はすぐに答えを出してくれた。

《大切なものなど、初めから無かったのだよ》と。

私が勝手に拓海に幻想を抱いていたのだ。

一番の友達だと思っていた彼にとって私は私の嫌う恋愛の対象でしかなかった。

その対象でしか見てもらえない私は、拓海にとってあの母と同じ『女』として生き、暮らさなくてはいけない。

女が嫌なんじゃない。
ずっと友達で居てくれると約束した拓海が、私をずっと『女』として見ていた事が酷く

心に違和感と凍える程の孤独を与えたのだ。

「ごめん、私用事があるから」

断って、私はまた拓海から逃げた。

大切な拓海を二度も傷付けてしまったのだろうと、罪悪感をまた背中にのせながら。

真新しい紺の制服
春の日差しと、桜の花びらのせいで明るく見える筈のその色は、酷く私を憂鬱にさせた。

1（後書き）

最後まで読んで下さりありがとうございます。

2（前書き）

拓海ｓａｉｄで書いた章です

2

大切な人がいる。

すごく無器用に生きている彼女を不本意にも幼い頃から好きになってしまっていた。

「うざったい！！付いてこないで！！」

幼馴染みの素奈緒……スナちゃんは小さい頃から口が悪い。

そして、中学三年の夏に俺が自分でもビックリだがスナちゃんに告白した。

そんな事と合間って、スナちゃんは昔よりもずっと、俺に対して口も態度も悪くなった。

「一緒に帰ろうよ、今日は暇なんだろ？」

スナちゃんはお母さんから月に結構な量の小遣いをもらっているのに、週に五回バイトをしている。

「バイトがないからって暇なわけじゃない、付きまとわらないで」

何度も脱色を繰り返して痛んだ髪の毛が、春の風に浮き上がっては柔らかく落ちる。

細くて小さな背中が、俺を拒絶しながらより小さく遠くなっていく。

しかし、無器用ながらも彼女は優しいため、ふりかえって立ち尽す俺に一つため息を溢すと、またこちらに戻ってくる。

「男なんだがらシュンって小さくなるなっ！」

スナちゃんは怒った口調でそう一言言うと、俺の腕を引っ張っていった。

スナちゃんの家は母子家庭だ。

しかも、お母さんが水商売をしているから、いつも家では一人なのだ。

一人なのは家だけではないかも知れないけど。

スナちゃんから友達や好きな異性の話しなど聞いた事がないからだ。

少し優越感に浸っていたんだ。

半分くらい人嫌いと言ってもいいほど人付き合いが苦手な彼女は、好んで人と関わろうとしない。

友達を作った方が良い、好きな男の子が出来たら毎日が楽しくなる。そんな助言をしながら俺は、彼女が俺以外の人間と関わりを持たないように為ているのを喜んでいた。

告白なんて、一生したくないと思っていた。
恋愛感情を彼女に向けているとバレたら、一緒にいられなくなると解っていたから。

でも、俺は人生至上最強最悪最後の失態を犯してしまったのだ。

「大体、なんでアンタはわざわざ私の家の向かいに引っ越して来たのよ」

ため息混じりにスナちゃんは呟いた。

入学式の三日前にスナちゃんの住んでるマンションの部屋の向かいに引っ越してきた。

丁度運の良いことに、多額の借金のせいでマンションを出ていく事となった前の住人に感謝しなくてはならない。

「マンションなんて息子に買い与えちゃって、藤川のおじさんはアンタの事溺愛しすぎなのよ」

スナちゃんの行く公立高校に行くことに関して、親父は反対しなかったけれど、母さんは猛反対していた。

どっちみち、この高校は親たちと暮らしていた家からは通えない。

高校生のうちから一人暮らしをさせる事などできないと、最後は涙を流しながら母さんは止めたけど、一人で学業に励んで、少しでも自立した生活を送りたい、と言うとやっと納得してくれた。

「だって学校あの家からじゃ通えないからな、親父も納得してくれて住む場所も手配してくれたし」

「だから、今からでもあの私立の何とか学園に戻ればいいでしょ？私立からいきなり公立に来て、アンタを追い掛けてきた実優さんも可哀想よ」

あんな馬鹿な女の名前なんか出すものじゃない。

スナちゃんに言われるまで完全に存在を忘れていた。

俺が黙っていると、持っていた学生用のバックを肩にかけなおし何度目になるか解らないため息をついた。

「可哀想よ、アンタの事学校追い掛ける位好きなのに、どうして優しくしてあげないのよ」

第三者として、恋愛事を見るのは平気なのか、スナちゃんは俺にしきりに早川実優を勧めてきた。

学校を追い掛けてきたのなら、俺だって一緒の事だ。
だけど、俺からの告白が余程嫌だったのか、スナちゃんは俺と居る時、自分が告白されたのを完全に忘れたように振る舞う。

俺の想いなど全て無視した彼女の行動。
普通の男なら好きじゃなくなる筈なのに、毎日毎日彼女に逢いたくて堪らなくなる。

どうしても忘れたくて他の女と付き合った事もあった。
でも、あの清々しい程の彼女の凛とした雰囲気と、時折見せるはにかんだような笑顔がどうしても忘れられなかったんだ。

「好きじゃないのに優しくされたって、向こうも辛いだけだろ」
吐き捨てるように言った俺の顔を驚いたようにスナちゃんが見張る。

「スナちゃんが俺を好きになってくれたら良かったのに」

自分で帰ろうと何度も誘った癖に、俺は立ち止まるスナちゃんを振り返らずにどんどん早歩きになる足を止められなかった。

眉を寄せて困り果てたような顔をした彼女を、そんな顔をしていても綺麗だと思って家についた途端にベッドに倒れこんだ。

バックをそこら辺に投げて両手で顔を覆う。

困らせたかったわけじゃない。

ただ、彼女を男として独占したいのだ。

幼い頃から手に入らない物が無かったわけじゃない。

物質的に親から与えられても、心は酷く渇いていた。

だからこそ、彼女の心を手に入れたい。

もう、お友達なんていうあやふやで不確かな存在でいたくないんだ。

独占して、俺という存在をいつまでも彼女の中に息付いていたい。

そんな事を彼女が許してくれる筈がないと言う事は俺が一番よく知っている。

彼女は恋人や夫婦という深い関係になるのを恐れている。

長いこと銀座のホステスである母親の影響だろうか、幼い頃に借金と暴力だけしか彼女に与えず出ていった父親のせいか、俺には解らない。

父の友人だという母親から、素奈緒をよろしくと耳元で囁かれて絶対守囁かれて絶対守ってやると意気込んだのは何年前の事だろうか。

枕元にある青いくまの縫いぐるみを引き寄せる。

幼い頃は大きく見えた縫いぐるみは年とともにだんだん小さく見えてくる。

まだスナちゃんも持ってくれているだろうか。

お揃いにと、親父が二人に買い与えた物だ。

ペアの縫いぐるみは一つは青いくまで一つはピンクのうさぎだった。

青い方が欲しそうだったスナちゃんだったけど、ピンクの方が似合っていたから押し付けたんだっけ。

冷色系より暖色系の方が実はスナちゃんは似合うんだ。

そんな事を考えて、幸幸せな気分になる。

一人で思い出し笑いなんて恥ずかしいけど、クスクス笑ってしまう。

徐々に瞼が重くなってきた。

帰ったらまだほどいていない荷物を片付けようと思ったけど、この幸せで柔らかい眠気には勝てなかった。

2（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

3（前書き）

素奈緒ｓｉｄｅです。

3

拓海に、初めて拒絶された気がした。

《優しくされたって辛いだけ》

《スナちゃんが俺を好きになってくれたら良かったのに》

私に言われている気がした。

12年間の間、私は拓海と、拓海は私と喧嘩になった事がない。
些細な言い合いはあったが、大体はわたしが悪かったりした。

でも、絶対自分が悪くないのに、拓海は私に嫌われまいと必死に謝ってきてくれた。

私達の関係は何て儚くて脆いものだったんだろう。

そう思うと、体が震えてきた。

歯がカチカチと音をたてて、もう立っているので精一杯だ。

拓海の背中がどんどん小さくなっていき、そして密度の少ない人混みに消えていく。

《スナちゃんって呼んでいい？》

《このお花あげるよ、スナちゃんに似合うから》

《スナちゃんってお姉さんみたいだね》

ダメだ、思い出が

《クラスのやつが馬鹿でさぁ》

《スナちゃんも友達作んなよ》

《スナちゃんスカートとかも似合うと思うんだけどなぁ》

いけない

潰されそうになる

《まってまって、花びら髪の毛に付いてるよ》

《おっ俺、スナちゃんがずっと好きなんだ！！》

私が拓海を好きにならなければ彼は私を必要としないのか

一つ、ため息にも似た震えた吐息を吐いて。

私は、遠く遠くに見える紺色のブレザーを着た拓海をすがるように目で追った。

立ち止まる事なく、振り返る事なく、私という存在を置いてきぼりにして、拓海はやがて見えなくなった。

発狂しそうだ

一人ぼっちになった事に

もうあの家に帰れない。

扉を開いても誰もいない、どこにいっても私は一人だ。

隣にいてくれると指切りしてくれた無二の友人も私を置いて消えていってしまった。

もういいだろう。

フラフラと歓楽街へと足を向ける。

春から夏へと急ぎ向かう今年の季節も、今日は私を隠す様に早くに日没を迎え、客を誘うように光るネオンだけが私を照らした。

そこら辺の安っぽいチェーンの洋品店で適当に買った簡易的な洋服に着替え、ショップ袋に真新しい制服を詰めると、暗がりの路地にあるインターネットカフェに入る。

セキュリティのしっかりしたビジネスホテルではいずれ足がつくため、長くこの生活をするならばインターネットカフェの方が適している。

どうせビジネスホテルは未成年を一人では泊めてくれないだろうし、どうせ補導されても母は迎えに来ないだろうと思った。

受付でやる気のない深夜バイトの店員に特別声を掛けられる訳でもなく、受付を済ませた。

体を十分に伸ばせない１．５ｍ四方の小部屋に入る。

灰色を基調としたその小部屋は、パソコンデスクにパソコン、時計だけで無機質だ。

何もする事がなくて、とりあえず美味しくないコーヒーをすすりながら蒼白い光を放つディスプレイに視線を移す。

人気芸能人のブログを一通り見て、下にあるＣＭコーナーをクリックする。

《真剣出会い！！即直メール！！》

どうかしてる。
でも、寂しさを癒すためなら、こんな出会い系にでも頼るしかなかった。

《こんにちは、Ｋ市に住む高校一年の女子です。》

高校一年女子という名前で早速書き込むと、一分もしない内に書き込みがきた。

高校生というのを見てか、えげつない書き込みが並ぶ。

吐気がした。

でもそんな奴らが集まるサイトにアクセスする私も同じようなものだろう。

《寂しいの？》

一つの書き込みに背筋がヒヤリとした。

《うん、何で解ったの？》

その人宛てに返事をした。
もしかしたら、この人も私と一緒かもしれない。

《俺も寂しいから、高校二年生で君の住んでる所の隣町に住んでるよ。》

やはり私と同類なのか、メッシュと名乗る奴は淡白な返信をした。

そのあっさりとした感じが気に入った。

何度かサイトに書き込みをするとアドレスを聞かれたので素直に教える事にした。

数分後に、ｅメールの着信を携帯電話が知らせる。

《こんにちは、サイトで書き込んだメッシュです》

緊張しているのか慣れていないのか、キッチリとした文章だ。

《こんにちは、高校一年女子だよ。よろしく》

一年年上と解っていたが、あえてタメでメールを打つ。
別に敬語だろうが、タメ語だろうが差し支えないだろう。
一度内容をざっと確認して、送信ボタンを押した。

《名前何ていうの？》

《中村素奈緒だよ。そっちは？》

《井上俊だけど、素奈緒って良い名前だな。》

《自分でも気に入ってる。》

そう送って、不意に母親の顔を思い出した。
私の名前は母と父が一緒に考えてつけてくれたそうだ。

《親がつけてくれたの？》

《うん》

《俺もだよ、両方死んじまったけどな。》

一気にシリアスな話になる。

こんな寂しい気持ちの時に空元気に明るい話をしても意味がないだろう。

《だから俊も寂しいんだね》

寂しいのは私も一緒の事だ。

送った途端に瞳を閉じた。

瞼の上に腕を乗せるとため息を吐く。

ため息の数だけ幸せが逃げるというが、私には無縁な気がしたから。

長いこと目を閉じていると不意に眠気の波が襲ってくる。

しかし、腕も足も伸ばせないこんな狭い箱の様な小部屋で眠れる訳もなく、私と俊は朝までたくさんのメールをした。

俊は隣町に住む高校二年生で、両親は不慮の事故により三歳の時に亡くなったそうだ。

その後母方の祖父に引き取られたが、先月その祖父も亡くなり、今は祖父の残した貯蓄と保険金を切り崩して生活しているそうだ。

趣味も性格も合いそうにないとメールだけしかしていないが解ったのだけれど、何故だかお互い一人きりの生活は寂しいという共通点が私達の関係を繋ぐバイパスを太く強くしていた。

朝６：００にうたた寝から覚醒した私は、インターネットカフェに備えつけられているシャワーを使って体を清めてから、制服に着替えると会計を済ませて外に出た。

まだ朝早い時間のためうっすらとモヤがかかった日の光が妙に心地良かった。

いつもならば、この時間位には一緒に登校しようというメールが拓海から来るのだが、今日は来ないだろう。

適当にコンビニで朝と昼用に菓子パンと飲み物を買って、安いシャンプーのせいでキシキシとした自分の茶髪をかきあげる。

学校までは家から行くよりも近いだろう。

そうふんだ私は通りかかった嫌に狭い公園のベンチに腰掛けた。

朝の気温はまだ冬の名残を惜しむかの様に少し肌寒い。

コンビニで買った菓子パンの一つを適当にビニール袋の中から取り出す。

何か確認しないままパッケージを開けると中身を頬張った。

どうやらメロンパンだったようで、水分の少ないそれをモソモソと疎嚼をする。

昨日の昼から何も食べていない胃袋は食品を欲していた。

《ピピピッピピピッ》
eメールが来たのだろう、制服のポケットに入っている携帯を取り出す。

送信者は俊だった。

《朝日が綺麗だね》

それだけを伝えたメール
そんな無器用なメールに吹き出しそうになる。

折り畳みのケータイを閉じると、もう一口メロンパンを頬張った。

朝日を見ると、綺麗過ぎてカッコ悪いけどパン片手で涙が出て不覚にも泣いてしまった。

私が一人ではないという錯覚が酷く心地好く私の胸に痺れをもたらしたから。

俊と出会ってたった一夜しか経っていない。

だけど、寂しすぎるこの状況から逃れたいために、私はひっそりと瞳を閉じた。

朝の匂いが鼻をくすぐる。

一気に飲み込んだせいか、二、三口しか食べていないパンが飽きてしまい、少し申し訳ないように思えたけれどすぐそばにあったゴミ箱に放った。

もうそろそろ学校が始まる時間だ。

なかなか真面目な私は高校に入学してからの約三週間、遅刻も早退もしたことがない。

バックに食糧を詰め込むとノッソリと立ち上がり、歩みを進める。

きっと、朝一番に拓海は昨日の事を謝ってくるだろう。

そうしたら笑顔で気にしていないと許してやろう。

歩きながら、ぼんやりとそう思った。

不思議と笑顔になれた

《良い1日になりますように》

柄にもない事をどこかに願って暖かくなっていく春の空気を全身に纏った。

3（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1206d/

手をのばせば君が

2011年1月26日08時24分発行